

妻への愛情表現に伴う夫の羞恥感
～なぜ、素直に愛していると言えないのか～

菅 原 健 介

吉 田 富二雄

片 山 美由紀

泊 真 児

Japanese husbands' embarrassment expression affection towards their wives

- Why can't they just articulate their love? - _____

Abstract_____

This study investigated the validity of four major models of psychological processes of embarrassment by using hypothetical situations in affection expression from husband to wife. The study sample was 512 Japanese males in marital relationships. Each husband was asked to rate their degree of embarrassment in a hypothetical situation in which they present a flower bouquet on their wife's birthday and say, "I am happy that I married you!" Their self-perceived affection levels towards their wives and the perceived love from their wives were evaluated using the Marital Love Scale, and the relationship between this and the husbands' embarrassment was investigated. The result suggested that the husbands whose affection level was low but who had high affection reception from their wives reported the highest degree of embarrassment. This result best suited the prediction of the disappointment distress model among the four investigated models. Further analysis indicated that husbands' embarrassment hinders their actual articulation of affection, even after controlling for their affection level. The effects of embarrassment on social relationships were discussed based on the current findings.

要 約

羞恥感（embarrassment）の心理過程を説明する4つの主要なモデルの妥当性を、夫の妻に対する愛情表現の場面を用いて検討した。既婚の日本人男性、512名を対象に、妻の誕生日に花束を渡し『君と結婚して幸せだよ』と言う場面を想像させ、そこで生じる羞恥感の程度を報告してもらった。また、妻に対する愛情と妻からの受けている愛情の認知についても回答させ、羞恥感との関連を検討した。その結果、妻への愛情が低い、妻からは愛されていると認知する夫において羞恥感が最も高かった。この結果は4つのモデルのうち、期待裏切りモデルの予測と一致していた。この他、夫婦間の愛情とは独立に、羞恥感が実際の愛情表現行動を抑制することも示された。羞恥感の対人関係への影響について考察された。

1. 問 題

羞恥感とは人間にとって日常的な情緒反応一つであるが、その生起メカニズムに関しては不明な点も多い。羞恥は“痛み”の感覚と同様に、それを予期した場合には回避行動を、また、それが生起した後には対処行動を発現させるという動機的機能を有している。痛みが身体的自己の危機を知らせるサインとすれば、羞恥感も言動や外見など社会的自己のあり方に対する警報と見ることができる（菅原, 1998）。しかし、その警告が自己をめぐるどのような不具合に向けられたものであるかについては諸説ある。主なものとして以下の3つが挙げられる。

一つは、社会的拒否モデルである。羞恥とは基本的に他者からの批判や拒絶など、否定的な評価に対する反応であり、社会的立場の喪失（Miller, 1995）、あるいは自尊心の低下（Modigliani, 1971）など、自己の社会的苦境やアイデンティティーの危機を知らせるサインとみる立場である。それ

ゆえ、個人は社会的立場を守るため、羞恥感を回避したり、緩和したりするために行動を起こすと考える。羞恥感に関して、多くの人々が一般常識的にイメージしている内容に近いものと言える。

これに対して、相互作用混乱モデル (Parrot, Sabini, & Silver, 1988) では、羞恥感を個人の問題ではなく、むしろ、個人と個人、あるいは集団内の社会的相互作用が円滑に進まなくなる事態での情緒反応としてとらえている。この考え方は社会学者のGoffman(1956)の演劇論的視点(dramaturgical approach)に立脚している。Goffman(1956)は個人間のコミュニケーションを演劇になぞらえ、参加者間でのお互いの役割に関する暗黙の理解が、円滑な相互作用の条件であると主張した。しかし、ある役者が重要なセリフを間違った時のように、何らかのアクシデントによって個人が役割から外れた行動をとると、関係性の前提が崩れ、本人だけでなくメンバー全員が行動の指針を見失ってしまう。その時、メンバー間に広がる困惑感が羞恥の正体であるとする。こうした視点に立てば、羞恥感とは個人だけの問題ではなく、自己が参加する社会的相互作用全体が崩壊する危機への警告とみなすことができる。

第3の期待裏切りモデル(菅原, 1998)は基本的な前提は社会的拒否説と同様、他者から自己が拒否されることへの警告として羞恥感をとらえる考え方である。ただし、それは単に他者からの否定的評価によって生じるものではない。このモデルでは個人が他者から特定の関係を許容されるのは、その関係に相応しい言動をとることを期待されるからであると考えられる。たとえば、恋人として認められるためには、相応の資質や魅力を有することが前提であり、その期待に応え続けることが関係を維持する条件となる。羞恥感とはこうした他者の期待を裏切ってしまうリスクへの警戒サインである。それゆえ、期待から逸脱した失態だけでなく、資質や能力の水準を超えた期待を向けられることも羞恥感を喚起させるとする。自分の実力以上の賞賛を受けることは、本人にとって期待を裏切るリスクであり、羞恥感が高まり、自己への過剰な期待を是正する行動を動機付けることになる。

では、3つのモデルのうちどれが妥当であろうか。本研究ではその試金石として、妻への愛情表現に伴って夫が感じる羞恥感に目を向けたい。たとえば、妻の誕生日に夫が花束を抱えて帰宅し、改めて妻への感謝と愛情を述べるような場面を想定してみよう。日本の夫婦において、結婚後、夫が妻に対して愛情を表現する場合、しばしば、「恥ずかしい」「照れくさい」などの羞恥感が生じる。「口に出さずとも気持ちは伝わっているはずだ」という言い訳もよく聞く。お互いに愛情を確認し合ったはずの夫婦関係であるが、なぜ、愛情表現に羞恥が伴うのだろうか。いろいろな俗説はあるが、このような問題に関して心理学の立場から、実証的に検討した例は見られない。こうした極めて日常的だが明確に説明しにくい事例をどこまでうまく説明できるかは、モデルの妥当性を検証する上での一つの重要な基準となろう。

まず、夫の妻への愛情と、妻から自分が向けられていると認知している愛情の2つの要因が羞恥感にどう影響するかについて、それぞれのモデルに基づき予測してみたい。社会的拒否説では、羞恥感を自己が他者から否定的な評価を受けることへの反応と考える。いわば、恋愛の告白と同じことであり、自信がない場合ほど不安は高まる。Schlenker & Leary (1982)によれば、こうした対人不安の大きさは、自己呈示の動機づけの大きさとそれに失敗する可能性の積の関数として表すことができるという。この関数を当てはめると、妻への愛情が高い夫ほど愛情表現を受け入れてもらいたいとする動機づけは高い。しかし、ここで妻からは愛されていないと認知した場合、自己アピールが拒絶される確率は高くなる。それゆえ、社会的拒否モデルに基づくと、妻への愛情は高いが妻からの愛情が低い、すなわち、自らの夫婦関係を「夫片思い型」と認知する夫において、愛情表現に伴う羞恥感が最も高まると考えられる。

一方、相互作用混乱モデルの視点からは異なる予測が導かれる。相互作用混乱モデルは個人が従来の役割から逸脱し、いつもの人間関係のシナリオが崩れることによって生じると考える。夫の愛情表現が役割を逸脱する

のは、日常、そうした役割をとっていないケース、すなわち、妻への愛情が低い場合に生じやすいと考えられる。さらに、妻の側も夫への愛情が低ければ、いわば、“冷めた”相互作用が定着している可能性が高く、こうした関係の中での愛情表現はさらに大きな混乱を生じさせる。従って、妻への愛情も、妻からの愛情もともに低い「愛情希薄型」の夫において、羞恥感が生じやすいと予測できる。

第3の期待裏切りモデルからは次のような予測ができる。夫が愛情表現をすることで、妻の側は夫が自分に親密な情緒的関係を求めていると認知するであろう。特に、妻側の愛情が高い場合には、たとえば、「夫との間で恋人時代のような会話が盛り上がるだろう」といった、ロマンティックな期待が高まると考えられる。こうした状況において、もし夫の愛情が低ければ、そうした妻の期待を裏切ってしまうリスクが生じる。従って、妻への愛が低く、妻からの愛が高い「妻片思い型」の夫において安易な愛情表現は、夫婦関係維持のためのハードルを高めるリスクとなり羞恥感が生じると考えられる。

このように、3つのモデルからは、それぞれ異なる予測が導かれる。社会的拒否モデルでは「夫片思い型」、相互作用混乱モデルでは「愛情希薄型」、期待裏切りモデルでは「妻片思い型」の夫において羞恥感が最も高いということになる。このいずれが実際のデータと合致するかを検討し、モデルの妥当性を考察することが本研究の目的である。

本研究では、これに加え、もう一つの別な羞恥感に関するモデルについても検証してみたい。羞恥に関する第4の理論は個人規範モデル(Babcock, 1988)である。羞恥感は本来、社会的評価とは無関係であり、個人の自己概念と逸脱した行動によって引き起こされると考える。たとえば、自分を勇気ある人物と考えている個人がバンジージャンプに挑戦できなかった場合、自分の行動に対して違和感を覚え、羞恥感が生じる。類似した考え方は、井上(1977)の私恥という概念にも当てはまる。他者から見られていなくても、日ごろの理念や規範から外れた自身の姿を自分が許せず、個人

は「人知れず恥を感じる」ことがある。これが私恥であるが、個人規範モデルはこれが羞恥の本質であると考えられる。この立場では、羞恥感とは自己概念から自己が逸脱することへの警告ということになる。

こうした立場をとると、愛情表現に伴う羞恥感はそのような行為が自己概念に合わないと感じる夫において高まりやすいと考えられる。そうした自己概念の一つとして「家庭君臨志向」が考えられる（菅原、詫摩、八木下、菅原、小泉、1997）。伝統的な性役割観が強く、支配—被支配の関係として夫婦関係をとらえている場合、感謝や愛情の表現は自己の「家長的イメージ」に相応しくないと感じるかもしれない。そこで、本研究では「家では自分が一番偉い」「家族が生きていけるのは自分のおかげ」といった意識について尋ね、羞恥感との関連性を検討する。家庭君臨志向が高い夫ほど羞恥感が強ければ、個人規範モデルの一つの傍証になるものと考えられる。

本研究の最後の目的は、羞恥感と実際の行動との関連である。羞恥感とは自己の社会的危機に対する警報と考えられる。よけいなリスクを背負いこまないよう、未来をシミュレートし、個人の行動を抑制することは重要な機能の一つであると考えられる。たとえば、樋口と中村（2009）は、コンドームを購入する場面を想像したとき羞恥感を感じるほど、購入意図が低いことを指摘しており、また、菅原ら（2010）は夏場の肌見せ系ファッションの着用が、自分がそれを着て外出した状況をイメージしたときに羞恥感を感じるかどうかによって規定されていることを示している。

同様に、本研究における想定場面で羞恥感を感じる夫は、実際の場面でも同様の観点から恥じらいを覚え、愛情表現を抑制するものと予想できる。本研究では、日常生活における「愛している」などの言葉がけの頻度についても尋ね、想定場面での羞恥感との関連性について検討する。

2. 方法

夫婦関係や育児ストレスに関する調査データ（吉田、菅原、片山、泊、高江、

広瀬, 1999) を新たな視点から分析し検討を行った。調査は1998年, 5歳以下の子どもを持つ育児雑誌の読者1000名の母親とその夫を対象に実施された。今回は夫のみのデータを使用した。夫の有効回答数は512名, 有効回収率は51.2%であった。夫の平均年齢は33.7歳(23歳~50歳)で, 平均結婚期間は5.7年(2年~18年)であった。尚, 妻の年齢は31.1歳(21歳~44歳)であった。本研究で分析の対象となった項目は下記の通りである。

①愛情表現時の感情を尋ねる項目

「奥さんの誕生日に花束を渡して、『君と結婚して幸せだよ』と言わなければならないとしたら, その時の気持ちはどのようなものですか」という設問に対し, 「恥ずかしい」「照れる」「気恥ずかしい」の3項目について, 「よく当てはまる」「当てはまる」「すこし当てはまる」「当てはまらない」の4件法で回答してもらった。また, その他の感情として「よい気分」「うれしい」「誇らしい」など喜びに関する3項目, 「ばかばかしい」「うっとしい」「みっともない」「くだらない」といった不快感に関する4項目についても同様に回答してもらった。

②実際の愛情表現の頻度

妻に対する実際の愛情表現として3項目を作成し, それぞれに関して最近の実行頻度を, 「しばしば」「時々」「たまに」「全くない」の4段階で回答してもらった。具体的な項目は「感謝や労いの言葉をかける」「好きだとか愛していると言葉に出して言う」「服装や髪型の変化などを指摘する」であった。

③夫の夫婦の愛情関係についての認知

夫自身の妻への愛情度, 妻の自分への愛情度の認知を測定するため, 菅原, 詫摩(1997)の夫婦関係尺度(Marital Love Scale)のうち3項目について評定してもらった。使用した項目は「妻(夫)は魅力的な女性(男

性) だと思う」「妻(夫)と一緒にいると、妻(夫)を本当に愛している
と実感する」「妻(夫)のためなら、何でもしてあげるつもりだ」であ
った。まず、夫の妻への愛情を測定した後、上記のカッコがついた方の項目
を提示し、妻ならどう回答すると思うかを尋ねた。いずれも、「当てはまる」
から「当てはまらない」までの4件法にて回答してもらった。

④家庭での自己イメージを尋ねる項目

菅原ら(1997)による夫の生活価値観の尺度から、夫自身の家庭内での
自己イメージを尋ねる8項目を抜粋して、自身にどの程度当てはまるかを
上記と同様の4件法で尋ねた。これらの項目は「マイホーム志向」「仕事
人間」「上昇志向」「家庭君臨志向」の4つの下位尺度から構成されている。

⑤その他の項目

夫の年齢、妻の年齢、結婚期間、子ども数など、家族の特徴に関する基
本属性について尋ねた。

3. 結 果

①愛情表現時の感情の構造

愛情表現時の感情に関する10項目について、最尤法、プロマックス回転
による因子分析を行ったところ、第1因子は「うっとしい」「くだらない」
「ばかばかしい」「みっともない」への負荷が.07以上と高く『不快感』を
示す因子と解釈された。同様に、第2因子は「気恥ずかしい」「照れくさい」
「はずかしい」の各項目の負荷量が.80以上と高く『羞恥感』の因子、第3
因子については「誇らしい」「うれしい」「よい気分」の負荷量が.08以上
となり『喜び』の因子と解釈された(表1)。そこで、各因子の因子得点
を算出し、それぞれの感情の強さを示す指標として後の分析に使用した。

各項目への回答の分布を見ると、「よく当てはまる」「当てはまる」「や

表 1 愛情表現時の感情の構造

	因子名		
	不快感	羞恥感	喜び
くだらない	.925	-.090	-.015
みっともない	.856	.039	.065
うっとおしい	.850	.051	.024
ばかばかしい	.787	.006	-.082
照れくさい	-.095	.939	-.023
気恥ずかしい	.028	.906	-.007
はずかしい	.077	.891	.027
誇らしい	.086	-.003	.856
うれしい	-.025	.031	.852
よい気分	-.077	-.037	.803

や当てはまる」「当てはまらない」の4件法のうち、「やや当てはまる」以上の回答率は、「よい気分」が85.6%、「うれしい」が86.7%と8割を超えて多かった。また、「気恥ずかしい」は85.6%、「はずかしい」は82.0%、「照れくさい」は91.2%であり、程度の差はあるが、全体的に妻への愛情表現は、嬉しいが恥ずかしい出来事としてとらえられていた。一方、「ばかばかしい」は23.0%、「くだらない」は23.4%、「うっとおしい」は20.1%などと、何らかの不快感を抱く夫は2割程度に留まっていた。

②夫婦関係尺度の構造とグループ化

妻への愛情の3項目に関して主成分分析を行ったところ、第1主成分の説明率が74.2%を占め、各項目の負荷量も0.8を上回っていることから1次元構造と判断した。そこで、夫の妻に対する愛情度の指標として3項目の合成得点を算出した。また、妻からの愛情の認知に関する3項目についても、主成分分析の結果、第1主成分の説明率が77.8%、各項目の負荷量も0.8を超えていたことから、1次元構造と判断し、合成得点を算出した。尚、信頼性係数(α)は妻への愛情度が.824、妻からの愛情認知が.856と十分な値を示していた。また、妻への愛情と妻からの愛情の認知との間には明瞭な正の相関が認められた($r=.434, p<.001$)。

次に、両尺度の得点によって調査対象者を上位得点群、下位得点群に分けた。それらを組み合わせると、夫も妻も愛情が低い「愛情希薄群」、妻への愛情は高いが妻からの愛情は低い「夫片思い群」、妻への愛情は低いですが妻からの愛情は高い「妻片思い群」、そして両者とも高い「熱愛群」に分けることができる。尚、夫の妻への愛情と妻の愛情の認知の間には中程度の正の相関が認められたことから、各セルに該当するサンプル数は愛情希薄群と熱愛群が相対的に多くなっている。

③夫と妻の愛情度が感情に及ぼす影響

愛情表現時の感情に、妻への愛情と妻からの愛情の認知がどう影響するかを検討した。夫の愛情度、妻の愛情度の高低をそれぞれ独立変数として、不快感、羞恥感、喜びの因子得点を従属変数として、 2×2 の分散分析を行った。各群の平均値、標準偏差、サンプル数は表2に示した通りである。

羞恥感：妻への愛情の主効果が有意 ($F=6.52, df=1, 490, p<.05$) であり、また、妻への愛と妻からの愛の認知の交互作用が有意 ($F=4.77, df=1, 490, p$

表2 各群における感情の平均値と標準偏差

	妻への愛	妻からの愛	n	平均値	標準偏差
不快感	低	低	159	.286	1.149
	高	低	60	-.176	.792
	低	高	80	.296	1.23
	高	高	191	-.326	.608
羞恥感	低	低	159	.093	.949
	高	低	60	.066	1.001
	低	高	80	.286	.9501
	高	高	191	-.186	1.032
喜び	低	低	159	-.438	.892
	高	低	60	-.070	1.048
	低	高	80	-.223	.898
	高	高	191	.475	.910

注) 数値は因子得点に基づく

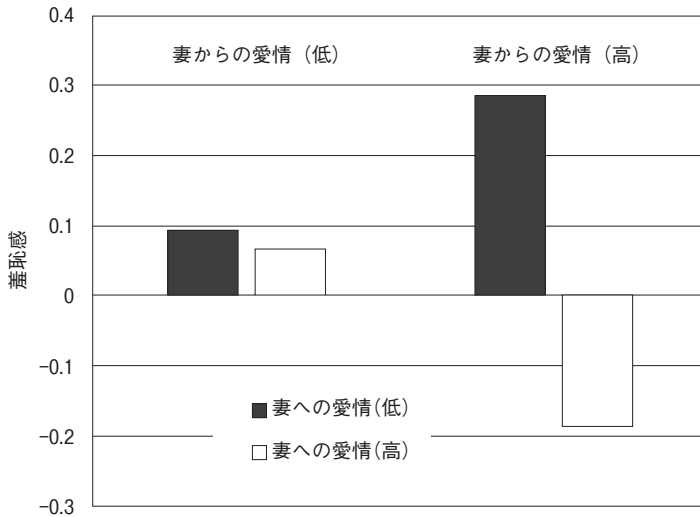


図1 羞恥感に及ぼす妻への愛情、妻からの愛情の認知の影響
(数値は因子得点の平均値)

<.05) であった。図1の通り、平均値を見ると、羞恥感には妻からの愛情認知が低い場合、妻への愛情の高低で差はほとんど見られないが、妻からの愛情認知が高い場合は妻への愛情の高低群で大きな差が生じている。結果として、羞恥感の平均値は妻への愛は低いが、妻からの愛を高く認知している「妻片思い型」で最も高かった。

確認のため、妻からの愛情認知が低い場合と高い場合に分け、妻への愛情と羞恥感との相関係数を算出した。全体で見ると妻への愛情と羞恥とは弱い負の相関 ($r=-.143, p<.001$) を示したが、妻からの愛情認知が低い場合に限ると無相関 ($r=-.002, p>.10$) であるのに対して、妻からの愛情が高い場合においては有意な負の相関 ($r=-.230, p<.001$) が認められた。すなわち、妻からの愛情認知が高い場合に限って、妻への愛情が低いほど羞恥感が高まることを示していた。

不快感： 妻への愛情の主効果だけが有意 ($F=32.3, df=1, 490, p<.001$) であり、全体に妻への愛が低い方が不快感は高かった。また、妻への愛情と

不快感との間には有意な負の相関 ($r=-.357, p<.001$) が認められ、妻からの愛情認知との間にも負の相関 ($r=-.214, p<.001$) が認められた。総じて、妻への愛情が低いほど、また、妻からの愛情認知が低いほど、愛情表現時には「ばかばかしい」「うっとおしい」などの感情が喚起しやすいことが示された。

喜び： 喜びについては、妻への愛情の主効果が有意 ($F=27.9, df=1,490, p<.001$) であり、また、妻からの愛情の認知の主効果も有意 ($F=14.2, df=1,490, p<.001$) であった。しかし、交互作用は認められなかった。また、妻への愛情と喜びとの間には有意な正の相関 ($r=.414, p<.001$) が、妻からの愛情認知と喜びの間にも正の相関 ($r=.353, p<.001$) が認められた。すなわち、全体に妻への愛が高いほど、また、妻からの愛を高く認知しているほど、愛情表現に喜びを感じていることが示された。

④夫の家庭内での自己イメージと感情との関連

次に、夫の家庭内での自己イメージが、愛情表現時の感情に及ぼす影響について検討した。自己イメージを尋ねる 8 項目について最尤法、プロマックス回転による因子分析を行ったところ、先行研究と同様、「マイホーム志向」「仕事人間」「上昇志向」「家庭君臨志向」の 4 つの因子が抽出され

表 3 夫の家庭内での自己イメージ

	因子名			
	上昇志向	家庭君臨	仕事人間	マイホーム主義
男として生まれたからには人の上に立ちたい	.957	.023	-.096	.013
社会の名声を得ることは男として大切だ	.703	-.013	.144	-.011
家では自分が一番偉いと思う	-.018	1.009	-.032	.070
家族が飯を食えるのは自分のおかげ	.041	.518	.081	-.138
仕事のためなら自分を犠牲にできる	-.044	.045	.687	-.012
仕事のない人生など考えられない	.060	-.009	.621	.026
家族が喜ぶなら何でもしたい	.002	-.036	.106	.636
家族が健康なら他に何も望まない	.005	-.015	-.086	.590

表4 夫の家庭内の自己イメージと羞恥感

	不快感	羞恥感	喜び
マイホーム主義	-.146**	-.055	.207**
上昇志向	-.040	-.017	.098*
仕事人間	.065	-.064	-.050
家族支配	.176**	.095*	-.082

*:p<.05, **:p<.01

表5 家族の要因と夫の羞恥感の相関係数

	不快感	羞恥感	喜び
妻年齢	.017	.016	-.037
夫年齢	.005	.007	-.056
子どもの数	-.056	-.022	.014
結婚後年数	.009	.102*	.006

*:p<.05, **:p<.01

た(表3)。 α 係数はこの順で.537,.607,.816,.689であった。「マイホーム志向」は値が低かったが、その他の指標については許容できる範囲であった。そこで、それぞれの因子に負荷量の高い項目の合成得点を算出し、羞恥感、不快感、喜びの各感情との相関係数を算出した。その結果、相関の値は全体に低かった。羞恥感については、唯一、家庭君臨志向との間に正の相関が見られたが、ごく弱い相関 ($r=.095, p<.05$) に留まっていた(表4)。

⑤夫の年齢、妻の年齢、結婚期間、子ども数と感情との関連

愛情表現時の感情と夫婦関係に関する基本的な変数との相関を算出した(表5)。不快感と喜びに関してはいずれの変数も無相関であった。羞恥感については結婚期間との間にのみ、ごく弱い正の相関 ($r=.102, p<.05$) が認められた。

⑥実際の愛情表現行動と感情との関連

実際の愛情表現行動と感情との関連について検討した。「感謝や労いの言葉をかける」「好きだとか愛していると言葉に出して言う」「服装や上方の変化などを指摘する」の3つの行動について頻度を尋ねたが、それらの

相互相関が.392～.511と高いことから、合成得点を算出し、実際の愛情表現行動の指標とした。合成得点の a 係数は.694と許容できる値であった。ちなみに、本サンプルにおけるこれらの行動の頻度であるが、いずれの項目も「しばしばやっている」は1割程度に留まるが、「時々やっている」を含めると、服装や髪形の変化は4割、感謝やねぎらいは3割、「好きだ、愛している」は2割程度が該当していた。また、愛情表現行動の合成得点と夫の年齢、結婚期間との相関係数は-0.1前後とごく弱い負の関連にとどまった。

次に、愛情表現行動を予測する要因を検討するため、これを従属変数とし、想定場面における不快感、羞恥感、喜びと、妻への愛情度、および、妻からの愛情認知を説明変数とするステップワイズ法による重回帰分析を行った。

その結果、1%水準以下の有意な標準偏回帰係数 (β) を示した変数は、羞恥感 ($\beta = -.344, p < .001$)、妻への愛情 ($\beta = .280, p < .001$)、妻からの愛情認知 ($\beta = .141, p < .01$) であった。調整済みの重相関係数 (R^2) は.289であり、上記の4つの変数で分散の約3割を説明できた。すなわち、実際の愛情表現行動は、想定場面における羞恥感が高いほど少なく、妻の愛情と妻からの愛情が高いほど多かった。つまり、夫婦間の愛情が高ければ夫の愛情表現も多いが、夫がこれに羞恥感を感じると抑制されることが示された。

4. 考 察

①社会的拒否モデル、相互作用混乱モデル、期待裏切りモデル

本研究の第一の目的は羞恥感のメカニズムに関する3つのモデルの妥当性について、夫の妻に対する愛情表現に伴う羞恥感を題材に検討を行うことであった。どのような夫が愛情表現時に羞恥感を感じやすいかという問題に対して、3つのモデルの予測は異なっていた。社会的拒否モデルに従えば、羞恥感を感じやすいのは妻への愛情は高いが妻からの愛情を低く認

知する「夫片思い型」であり、相互作用混乱モデルに従えば妻への愛情も妻からの愛情認知も低い「愛情希薄型」のはずであった。しかし、実際、羞恥感が最も高かったのは妻への愛情が低い、妻からの愛情を高く認知する「妻片思い型」であり、これは期待裏切りモデルの予測と一致していた。この点は、妻への愛情と羞恥感との相関係数という視点からも確認できる。まず、社会的拒否モデルでは、羞恥感は愛情が妻に拒否されることへの懸念から生じると考えるので、妻への愛情の高さが前提となる。それゆえ、妻への愛情と羞恥感が正の相関を示す必要がある。しかし、実際には弱いながら負の相関 ($r=-.143$) を示したことから、社会的拒否モデルはこの時点で妥当ではないと判断できる。次に、夫の妻への愛情と羞恥感の負の相関は、妻の愛情が高い場合と低い場合を比べたとき、どちらが高くなるかを考えてみたい。相互作用混乱モデルでは日常の夫婦関係が冷めている方が羞恥感は生じやすいと予測する。そのため、妻への愛情の低さは妻からの愛情認知が低い場合の方がより強く羞恥感につながりやすいと考えられる。従って、妻からの愛情認知が高い場合より、低い場合に、妻への愛情は羞恥感と負の相関を示すはずである。一方、期待裏切りモデルによれば、妻の期待が高まるのは妻からの愛情が高い場合であるから、この条件において妻への愛情が低いほど期待を裏切るリスクが生じ、羞恥感が高まるはずである。そこで、妻への愛情と羞恥感との相関係数を算出したところ、妻からの愛情が低い条件では無相関 ($r=-.002$) であったが、妻からの愛情が高い場合は有意な負の相関 ($r=-.23$) を示しており、期待裏切りモデルと一致していた。

このように、3つのモデルの中では期待裏切りモデルが、実測値に最も近く、妻への愛情表現時の羞恥感を説明する論理として最も妥当であると考えられる。

②個人規範モデルについて

本研究では羞恥感の第4のモデルである個人規範モデルについても検討

を行った。個人規範モデルとは自己概念から逸脱した行為が羞恥感を引き起こすとするものであり、愛情表現の文脈においては、家庭の中での夫の自己イメージとのズレがこれに関連するものと考えた。そこで、本研究では、「マイホーム主義」「仕事人間」「上昇志向」「家庭君臨」の4つのイメージについて羞恥感との関連を検討した。妻への愛情表現から最も遠いイメージと思われたのが、「家では自分が一番偉い」「家族が飯を食えるのは自分のお陰だ」といった家庭君臨志向で、家族に感謝され、尊敬される存在として自分を認知している夫である。妻への感謝や愛情表現は家庭内での“上下”の立場を逆転させることになるので、こうした夫は愛情表現と自己イメージとの乖離を強く意識化するものと考えられる。それゆえ、個人規範モデルの立場からは家庭君臨志向と愛情表現時の羞恥感との間には正の相関が予想された。

相関のパターンをみると、確かに、家庭君臨志向と羞恥感の間には正の相関が認められたが、その値は0.11にも満たず、極めて低い値であった。個人規範モデルが否定されたとは言えないが、少なくとも、家庭君臨志向からの逸脱という論理だけでは十分な説明にはならないと言えよう。

③実際の愛情表現行動との関連

本研究では、未来をシミュレートし、個人の行動を抑制する羞恥感の役割に注目し、想定場面での羞恥感が実際の愛情表現行動にも影響を与えているかを検討した。愛情表現の多寡はまずその動機づけの高さによって規定されと考えられる。回帰分析の結果、愛情表現の頻度は夫の妻に対する愛情が高いほど、また、妻から愛されていると認知するほど多くなることを示していた。しかし、興味深いことは、こうした愛情の要因を考慮したとしても、なお、羞恥感の影響が残ったという点である。別な言い方をすれば、夫婦間でお互いの愛情を確信していたとしても、恥づかしいという理由で夫が愛情表現をしないケースも少なくないということである。

もちろん、先にも見てきた通り、この羞恥感の背景にも妻への愛情の低

さという要因が関わっていた。そうした意味で、妻への愛情の低さは愛情表現行動の直接的なモチベーションとしてだけではなく、羞恥感を媒介として間接的にも愛情表現を抑制していると言える。それゆえ、愛情表現行動の多寡は妻への愛情の程度を反映しているということができよう。

ただ、妻への愛情が羞恥感に影響したのは、それが妻からの期待に対応するための“資源”になるからである。愛情が低ければ、愛情表現行動の直接的な動機づけが高まらないだけではなく、妻の期待に応えるための技能やコンテンツも乏しいと考えられる。それゆえ、仮に妻への愛情が高くとも、その他の理由によって期待に応えるための資源が不足すれば羞恥感も高まりやすく、結果として愛情表現が少なくなる可能性も考えられる。たとえば、仕事などの関係で夫婦二人の時間が確保できなければ、会話を継続するための話題が不足するであろうし、職場でのストレス等で役割行動を行うための心の心理的資源が不足していれば、あえて妻に高い期待を持たせる言動を抑制することもありうる。

今回は3つのモデルを比較することが目的であったため、夫婦間の愛情にのみ注目したが、実際の愛情表現行動の少なさは、必ずしも妻への愛情の乏しさだけが原因とは言えない。そもそも対人関係は好き嫌いだけで成立しない複雑な過程である。夫婦といえども、相手からの期待を適正にコントロールすることも、関係の継続には欠かせない要素である。愛情表現時の羞恥感はそのような対人関係の複雑さを物語る現象の一つであると言えよう。

④今後の課題

誕生日に花束を渡し、『君と結婚して幸せだよ』と言う場面を想像してもらった時、不快感と喜びの感情についての要因は極めてシンプルなものであった。双方の愛情が低いと認知する夫は「ばかばかしい」「うっとおしい」などの不快感を、双方の愛情が高いと認知する夫は「よい気分」「誇らしい」などの喜びを感じていた。これに対して、羞恥感は複雑な要因の

組み合わせによって生じることが示された。すなわち、妻への愛情が低く、かつ、妻からの愛情が高いと認知する夫で羞恥感が高く、期待裏切りモデルと一致していた。

期待裏切りモデルは期待に対する自己呈示の失敗だけでなく、自己像に相応しくない過剰な期待も羞恥を生じさせると主張する。この考え方は、羞恥が他者からの否定的評価に対する警報サインであるという考え方を基本としながらも、ほめられるのになぜ恥じらうのかといった、それと一見矛盾する現象を説明できる（菅原, 1992, 1998）。このように、羞恥は極めて日常的な経験ではあるが、なぜ恥ずかしいのかを説明することが難しい現象を多々含んでいる。妻への愛情表現に伴う恥ずかしさも、そうした事例の一つであり、こうした奥の深い羞恥という感情を紐解いてゆくナビゲーターとして、期待裏切りモデルには有用性があるように思われる。

ただし、期待裏切りモデルだけが、唯一、羞恥感を説明できる理論と言えるかどうかについては今後、さらなる議論が必要である。羞恥感が喚起し何らかの対処行動が発現するプロセスを考えると、期待からのズレだけではなく、自己イメージとの乖離や役割の混乱などが継時的に生じている可能性もある。つまり、羞恥感に関する諸モデルは、それぞれが羞恥という過程の異なる一部を切り取って説明しているのかもしれない。樋口(2002)は公の場で恥をかく場面、私的に反省して恥を感じる場面において、自尊心の低下や相互作用の混乱、評価懸念などが一連の心のプロセスとして発生し、それら全体を個人は羞恥感として意識していることを示唆している。

また、羞恥感という感情が単一のものではない可能性もある。菅原(1991, 1998)は羞恥感の要素として「ハジ」と「テレ」との2つの成分を認めているし、樋口(2002)は「恥ずかしい」などの基本的な恥感情の他、自己否定感、いたたまれなさ、もどかしさなど4つの要素を見出している。また、薊(2008, 2009)は自己が脅かされる状況で生じる感情として、罪悪感、羞恥感、屈辱感(humiliation)を区別し、それぞれの特徴の違いを指

摘している。多様な羞恥感のモデルは、それぞれ説明している感情が異なるという考え方も成り立ちうる。感情という主観的な現象を客観的な基準によって整理することが求められる。

<引用文献>

- 薊理津子 (2008) 恥と罪悪感の研究の動向 感情心理学研究 16, 1, 49-64.
- 薊理津子 (2009) 屈辱感, 羞恥感, 罪悪感の喚起要因としての他者の特徴 パーソナリティ研究 18(2), 85-95
- Babcock, M.K. (1988) Embarrassment: A window on the self. *Journal of the Theory of Social Behavior*, 18, 459-483.
- Goffman, E. (1956) Embarrassment and social organisation. *American Journal of Sociology*, 62, 264-271.
- 樋口匡貴 (2000) の構造に関する研究 社会心理学研究 16(2), 103-113
- 樋口匡貴 (2002) 公恥状況および私恥状況における恥の発生メカニズム～恥の下位情緒別の発生プロセスの検討：恥の下位情緒別の発生プロセスの検討～ 感情心理学研究 9(2), 112-120
- 樋口匡貴, 中村菜々子 (2009) コンドーム購入行動に及ぼす羞恥感情およびその発生因の影響 社会心理学研究 25(1), 61-69
- 井上忠司 (1977) 世間体の構造 社会心理史への試み NHKブックス 日本放送協会
- Miller, R. S. (1995) On the nature of embarrassability: shyness, social evaluation, and social skill. *Journal of Personality*, 63(2), 315-339.
- Parrott, W. G., Sabini, J., & Silver, M. (1988). The roles of self-esteem and social interaction in embarrassment. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 14, 191-202.
- Schlenker, B.R. & Leary, M.R. (1982) Social anxiety and self-presentation: a conceptualization and model. *Psychological Bulletin*, 92, 641-669.

- 菅原健介・詫摩紀子・八木下暁子・菅原ますみ・小泉智恵（1997）夫婦間の愛情関係に関する研究(3)－夫と妻のライフスタイルとの関連－ 第8回日本発達心理学会大会発表論文集 59.
- 菅原健介（1991）対人不安の類型に関する研究 社会心理学研究 7, 1, 19-28
- 菅原健介（1992）新しい役割の遂行場面における「テレ」の現象について－初めて保育園教育実習を経験した学生への調査結果から－ 江戸川大学紀要「情報と社会」2, 31-39.
- 菅原健介（1998）人はなぜ恥かしがるのか サイエンス社
- 菅原健介, 片山美由紀, 泊真児, 吉田富二雄（1999）妻への愛情表現に伴う羞恥のメカニズムについて－羞恥に関する社会的拒否説, 相互作用混乱説, 期待裏切り説の妥当性比較－ 日本社会心理学会第40回大会発表論文集 180-181.
- 菅原健介・鈴木公啓・完甘直隆・五藤睦子・藤本真穂 2010 身体露出に伴う羞恥感～“肌みせファッション”の着用行動を例に～ 聖心女子大学論叢 114, 177-200. 80,2, 83-89.
- 菅原ますみ・詫摩紀子 1997 夫婦間の親密性の評価：自記入式夫婦関係尺度について 精神科診断学 8, 155-166.
- 吉田富二雄, 菅原健介, 片山美由紀, 泊真児, 高江幸恵, 広瀬彩子（1999）育児ストレス感尺度の作成－育児ストレスとプライベート空間の機能(1)－ 日本心理学会第63回大会発表論文集 709

付 記

※本研究は日本社会心理学会第40回大会にて発表された育児ストレスとプライベート空間に関する調査データ（吉田, 菅原, 片山, 泊, 高江, 広瀬, 1999）を再分析したものである。

※連名発着者の所属は次の通りである。吉田富二雄（東京成徳大学）, 片山美由紀（東洋大学）, 泊真児（沖縄国際大学）。

